

平成 24 年度入試の出題の意図・採点総評



北九州市立大学

一般選抜

外国語学部	．．．．．	P 1
経済学部	．．．．．	P 5
文学部	．．．．．	P 8
法学部	．．．．．	P12
地域創生学群	．．．．．	P14
国際環境工学部	．．．．．	P15

推薦入試

外国語学部	．．．．．	P25
経済学部	．．．．．	P27
文学部	．．．．．	P28
法学部	．．．．．	P31
国際環境工学部	．．．．．	P32

A0 入試

外国語学部	．．．．．	P40
地域創生学群	．．．．．	P41

平成 24 年度入試の出題の意図、採点総評 《一般選抜》

◆ 外国語学部 前期日程（英語）

<出題の意図・ねらい>

試験では高等学校卒業程度の基礎学力とともに英語読解力、英語表現能力を判定する。

問題 1 は長文読解。科学的問題（言語の起源が音素の数が最大であった 5 万年前のアフリカ西部にたどることができるという学説）について論じた英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか（問 1 ～問 6）、英文が正確に日本語にできるか（問 7）、指示代名詞が何を指すか（問 8）を問う。

問題 2 は長文読解。文化的問題（イギリスにおけるスポーツの歴史を叙述するもの）について論じた英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか（問 1 ～問 7）、指示代名詞が何を指すか（問 8、問 10）、英文が正確に日本語にできるか（問 9）を問う。

問題 3 と問題 4 は和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

問題 5 は英作文。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを英文で書く力を問う。

<答案の特徴と傾向>

問題 1 は長文読解。科学的問題（言語の起源が音素の数が最大であった 5 万年前のアフリカ西部にたどることができるという学説）について論じた英語エッセイを読む。

問 1 ～問 6 は英文の内容を正確に理解できているか問うところ。よくできていた。

問 7 は英文が正確に日本語にできるか問うところ。Despite…which の構文はほとんどの受験生が正しく理解していた。Directed の訳が完全にできているか否かがポイントとなった。

問 8 は指示代名詞が何を指すか問うところ。正確にとらえていない解答が散見された。

問題 2 は長文読解。文化的問題（イギリスにおけるスポーツの歴史を叙述するもの）について論じた英語エッセイを読む。

問 1 ～問 7 は英文の内容を正確に理解できているか問う。よくできていた。

問 8 は指示代名詞が何を指すか問う。英語で解答するように指示されているのもかかわらず、日本語で解答している考案が全体の四分の一くらいあった。

問 9 は英文を正確に日本語にできるか問う。全体的によくできていたが、may not の意味を取り違えている受験生が多かった。

問 10 は指示代名詞が何を指すか問う。余計なことを解答したり、多くの言葉で解答したりと必ずしも的確に解答されたものは多くなかった。問題の意図を充分理解していないで、スポーツとは関係ない答案も見られた。

問題3は和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

誠実に問題に取り組んだ答案が多く、白紙解答はほとんどなかった。反面、「何が」「どうだ」と「感じる」のか正確に読み取る必要がある。日本語のほうを正確に分析できていない答案も多かった。自動詞と他動詞の区別ができていない答案、語彙の取り違えも目立った。

問題4も和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

日本語の文は一文であるにもかかわらず、二つの文に分けてしまうため流暢な英文から離れる例が多かった。「東洋」という言葉を英語できちんと表現できる受験生は少なかった。

問題5は英作文。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを英文で書く力を問う。

よくできたエッセイ、特別例外的な主張を打ち出すエッセイは今年は少なかったが、全体の平均は昨年並みと言っていい。構文に正確さを欠く答案、前置詞の使い方がうまくできていない答案が多く見られた。英語の語彙力が限られている点が際立っていた。創作力のレベルはもう少し高くあってほしかった。

◆ 外国語学部英米学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題 1

問 1 仕事に関する新しい考え方を述べた文で、英文は主に引用文で構成されており、かなり複雑な構文を含んだ箇所がある。このため、第一に論の流れが把握できるかどうか、また、英語の構文理解が十分にできているかどうかを問う問題である。

問 2 現代の若者にも近い将来のこととして関心があるテーマであると思われるため、日常的に考えていることも多いと思われる。自分の経験として具体的に論を展開できるかどうかのポイントになる。

問題 2

学校生活の中の身近なテーマで各自の意見を問う問題であるが、自分の論を支持する論拠を明確に出せるか、それを論理的に英文として表現できるか、がポイントである。

<答案の特徴と傾向>

問題 1

問 1

概して的外れな解答は少なかった。全体を十分によく把握でき、キーポイントになる文や語句を上手く抜き出すことができ、それを上手く所定の字数内に纏めることが出来たかどうか、得点の分かれ目となった。

問 2

概ね予想した書き方、著者の意見に賛成であるという立場からの内容が多かった。ただ、その根拠となる理由を一般論としてしか述べてないものが多かったため、具体的に自分の経験と照らし合わせて述べているかどうかのポイントとなった。

問題 2

概して英語のレベルは比較的高かったといえる。しかしながら、パラグラフ構造の把握が十分にできていない学生が多かった。さらに言えば、議論の論理をもっと考える必要があり、自分の意見を支持する根拠を提示する努力をすべきと思われる。

◆ 外国語学部中国学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

近年、消滅の危機にさらされている言語は世界で約 2,500 あるといわれている中で、言語の消滅過程について論じた文章を問題文とした。問一は、作者の主張を正確に理解する読解力、内容を要約する思考力、それを整った文章で表現する作文力が身につけているかをみるものである。問二は、問題文の要約をふまえ、受験生が自らの意見を定められた字数内で展開できるかをみるものである。新しい言語（中国語）を学ぼうとする学生に対し、中国語だけではなく英語や日本語、地方の方言などを通して、言語の多様性に関心をもってほしいという意図から、問題文を選定した。

<答案の特徴と傾向>

問1の出題文の要約については、正確にまとめている答案が多かった。問2については、全体的に明確さとまとまりがある答案が多かった。その一方、「言語の消滅」という近年注目されているテーマであったためか、論述の内容は類似したものが多く、独自の観点から論じた答案は非常に少なかった。また、基礎知識上の誤りが見受けられる答案も見られた。

◆ 外国語学部国際関係学科 後期日程 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

この試験では資料として、大学新卒者の就職事情と大学の役割について、異なる角度から論じた二つの文章を取り上げた。問1、問2では、それぞれの筆者の主張を的確に読み取る読解力と、それをまとめあげる文章作成能力を確かめることをねらいとした。また、問3のねらいは、今日の社会における大学の役割について、二つの見解に対する賛否の立場を示しつつ、自分の考えを明快かつ論理的に文章で表現する能力を見ることであった。

<答案の特徴と傾向>

問1：

「大卒者の就職難」に関して、「その原因は終身雇用制にある」との見方を否定し、大学生が増えすぎたことに原因があるとの著者の主張については多くの受験生が理解できていたようである。しかし、「大学生」といっても、企業が重視する「偏差値の高い大学」の卒業生は必ずしも増えているわけではなく、それが昨今の「大卒者の就職難」の実態であるという点まで理解した答案はあまり多くはなかった。また、著者は「大卒者の就職難」への対応策として、中小企業への就職や大学での新たな役割に言及しているが、この文脈でこれらの主張を理解している答案は少なかった。

問2：

文章力や構成に加えて、課題文の論旨として次の3つのポイントを把握しているかを判断基準とした。すなわち、若い世代の就職状況に関して、①企業が依然として新卒一括採用方式にこだわるのが根本的な問題であること、②大学→就職という進路だけしか認めないのではなく、大学院進学やボランティアなど多様な選択を許容するようになるべきであること、③そのために制度と意識を変えて行くことが求められること。大半の答案は以上のポイントが盛り込まれていたが、課題文の冒頭の部分に引きずられて、バランス良くまとめられていない答案が見られた。

問3：

この問題は、大学と社会の関係について、二つの資料で展開される主張の違いを明らかにし、いずれかを支持する理由とともに論じることを求めている。両者は大学の果たすべき役割、学ぶ対象などに関する考え方に違いがあるが、それぞれの主張を正確に把握せず、思い込みで論を進める例が見られた。解答のほとんどは資料二の議論を支持するものであったものの、著者が重視する「学問の場」としての大学に関する言及は相対的に少なかった。また、資料の要約のような答案が見られたうえ、規定の字数に満たず、減点対象となったものも2割程度あった。

◆ 経済学部 前期日程 (英語・数学)

《英語》

<出題の意図・ねらい>

問題Ⅰ

- 問1 基本的な英語の構文を正しく取れているか、また、any の訳出が正しくできるかを問う。
- 問2 基本的な英語の構文を理解した上で、自然な日本語に訳出できているかを問う。
- 問3 ひとつのキーワード、「similar event」の意味が、本文に則して理解できているかを問う。
- 問4 第6段落で記述されている内容が正しくつかめているかどうかを問う。
- 問5 基本的な語彙の知識があるかどうか、および文の構造を正しくとれているかを問う。

問題Ⅱ

- 問1 基本的な英語の構文を正しく取れているか、特に不定詞を正しく取れているかを問う。
- 問2 本文の流れを正しく理解できているかを問う。
- 問3 数値を表す表現を正しく理解できているかを問う。
- 問4 無生物の主語の構文を正しく理解できているかを問う。

問題Ⅲ

与えられた日本文を的確な英語を用いて記述する力を見る。特に語彙や構文の適切さ、文法的な英文を書く力を問う。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ

問1 “South Korea” や、“undergraduate student” を正しく訳せていない答案がかなり多く見受けられた。また、「カナダとイギリスを除いた他のどの海外の国よりも多い」とすべきところを「カナダとイギリスよりも多く」と誤訳している答案が目立った。

問2 構文を正しく理解していない答案や、単語の誤訳をしている答案が多く見られた。

問3 概ね題意は捉えられていたものの、下線部の後の文の内容を解答している答案も多く見られた。

問4 全体的にはできが良かったように思われるものの、設問の意味を理解していない解答も相当数あった。また、英語の基本構文の一つである、「the 比較級 ~ the 比較級」の構文の意味を理解していない答案や、ゼロ・サムゲームの意味を理解していない答案も多く見られた。

問5 基本的な語彙の知識はあるものの、直訳しすぎて、日本語の文章になっていない答案や、一方、意識しすぎて、元の文から離れて間違っている答案も一部見られた。答案の大半は、文の構造を正しく捉えていたが、全体としての文脈を正確に読み取るという点に関しては、少々不足しているように思われた。

問題Ⅱ

問1 答案の多くは構文を正しく理解していたが、“to blow air over a bucket of ice” の箇所、特に“over”の意味を正しく理解していない解答も散見された。

問2 言葉足らずで、「自分はわかっている」ことをうまく表現できていない答案が多かった。

問3 概ねよくできていた。

問4 全体的によくできてはいたものの、“that of the entire globe”が、動詞“altered”の目的語であるという文構造を十分理解していない答案が散見された。また、動詞alterの意味を知らないと思われる答案が多かった。

問題Ⅲ “role”を“roll”、“daily”を“dairy”と書くなどの、綴りの間違いが多く見られた。

問題Ⅳ 「地下」や「来る日も来る日も」という日本語の表現を、正しく英訳できていない答案が著しく多かった。また、関係節の用法が十分理解できていない答案が一部にあった。

《数学》

<出題の意図・ねらい>

本学の数学入試では、基本的な問題が出題されています。いわゆる難問は出題されません。基本的な定理や公式の理解力と論理的な思考力を試すのがねらいです。単なる暗記力や計算力よりも、問題の分析能力と的確な判断力や工夫する力を見るのがねらいです。また、出題の範囲に十分注意してください。

<答案の特徴と傾向>

問題1

問題1は基本的な事項をきちんと理解していれば解ける問題です。(1)と(2)は等差数列とその和の公式の理解が出来ていれば解答は容易であり、多くの答案が正確に解答できていました。(3)が最も正解の答案が少ない問題でした。しかしながら、式変形に気づけば比較的容易に解答できる問題です。(4)は不等式条件を正しく処理することができるのかがポイントになります。この条件を正しく処理できず、数多くの答案が減点の対象となりました。(5)は(4)を解くことができれば容易な問題です。

問題2

この問題は微分と積分の基本的概念やそれらの関係をきちんと理解しているかどうかを問うものでした。小問(1)と(2)は微分と積分の関係から特定の関数を導く問題で、(3)はそれらの関数を持ちいて作られる関数の形状を微分の手法を利用して判定する問題でした。答案の傾向としては、(2)の正解率は高かったですが、積分の基本的性質についての理解度が低い受験者が多くて、(1)の正解率が低く、したがって(3)の解答も不正確なものが多かったと思われます。

問題 3

この問題は、三角関数と図形について考える力を見る問題でした。(1)は、基本的な定理を利用する問題でしたので、正答率は高かったのですが、計算ミスが見受けられました。(2)は、円に内接する四角形の性質を利用すれば解ける問題でした。この問題では、題意に含まれない条件を勝手に付け加える解答がかなり見受けられました。(3)も円に内接する四角形の性質と三角関数の基本的な定理を利用する問題でしたが、計算ミスが非常に多く見受けられました。(4)は、ほとんど解答されていませんでした。

問題 4

この問題は組み合わせの数や確率を求める力を見るものです。解き方は分かっているも単純な計算ミスにより答えが違ふことが多いようでした。解答率は比較的高かったです。(1)(2)は基本的な問題で公式を用いれば容易に解くことができ、解答率は高かったです。(3)は1, 2, 3それぞれの数字のカードが出る確率を求めてから解く方法とそれぞれの箱ごとの期待値を求めてから解く方法が見られましたが、前者で解くと(4)の解が求め易くなります。(5)は正の方向、負の方向それぞれ最大、最小でどれだけ移動するか考えて、合計が3となる組み合わせの場合の数が求められれば計算できますが、解答率は低かったです。

◆ 経済学部 後期日程 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

経済を含む社会事象は非常に複雑であり、我々の直感的な理解を拒み、複数の解釈を許すことが多い。それゆえ、社会理解を深めるために、対立する論点を整理・検討することが有効である。

今回の出題は、社会問題の中でも比較的身近な食料問題を取り上げ、受験生の理解力を測ることを意図している。

設問1では、日本の食料生産に関する2つの立場の違いが、提示した文章から読み取れているのかを問うた。文章1を批判する文章2の根拠を明示してもらいたい。

対立する論点を検討する場合、どちらか片方に肩入れするのではなく、双方の立場を十分に理解しなければならない。そのため設問2では、文章1の立場から文章2に反批判を加えてもらった。一般的な公式見解のように見える文章1の背景に、受験者の考えが及ぶことを期待している。

<答案の特徴と傾向>

設問1における「食料自給率のカラクリ」とは、大きくは「生産額ベース」で自給率を計算すべきところを「カロリーベース」で計算しているところにある。課題文では、これら2つの自給率の相違点が複数指摘されていたが、答案ではそれらをバランスよく整理したものは少なかった。特定の相違点のみにとらわれたものが多く、課題文の読解が十分できているとは判断できないものが多かった。

設問2では、自分自身の考えとは別に、「文章1の立場からの反批判」という前提で論述してもらったが、そのような形式にとまどったのか、単に文章1を要約しただけのような設問の条件を満たしていない答案も見受けられた。

それ以外では、情緒的な内容の論述が目についた。多くの受験生が、食べ残しの問題を取り上げ、みんなの心がけでそれを減らさなければいけないと論じていた。もちろん、その指摘は正しい。しかし他方で、社会問題は「心がけ」のみでは解決しない。社会の仕組みに関心が向かっているような答案が少なかったのが残念である。

◆ 文学部比較文化学科 前期試験（総合問題）

<出題の意図・ねらい>

【問題Ⅰでは主として英文読解能力、問題Ⅱでは英語表現能力を問う。】

問題Ⅰ：多人種・多民族社会アメリカにおける人々のアイデンティティの問題が、第二次大戦中の日系人の例を中心に論じられている。文章の流れを正確につかみ、問題文のテーマを理解できているかどうかを試した。

問1【英文和訳】 “less fortunate” の意味を正確に理解できているかがポイントとなる。

問2【選択問題】 基本的なイディオムの知識について問うと同時に、文脈から正解を導き出すための読解力も試した。

問3【英文和訳】 問題文全体の流れを踏まえたうえで、訳すことが必要となる。

問4【選択問題】 英文の理解力を問うた。

問5【読解】 日系アメリカ人に “the two questions” が突きつけた問題をきちんと理解できているかを問うた。

問6【読解】 問題個所の前後だけではなく、文章全体を理解できているかどうかを問うた。

問7【英文和訳】 正確に訳すためには、問題文のテーマを理解できているかどうかポイントとなる。

問8【読解】 関係副詞、接続詞、関係代名詞を含むやや複雑な長文の構造を正確に把握できているかを問うた。

問題Ⅱ：英語の語彙力、慣用表現の理解、英文構成能力、英文法に関する習熟度を総合的に問うための和文英訳の設問。こなれた分かりやすい英文に訳されているかどうかを試した。

【問題Ⅲは、正確な読解力・理解力を問う問題。問題文は、身近なテーマである身体的な「しぐさ」を通して共有される文化がテーマとなっている。】

問一 日常的に用いられる漢字の書き取りをできるかどうかを問う。

問二 慣用的表現の理解を問う問題。とくに文脈に即して意味を捉えることができているかを重視。

問三 筆者の論理展開のしかたを理解できているかを問う。

問四 本文中に繰り返されているキーワードを捉えることができているかを問う。

問五 本文の趣旨を端的にとらえ、的確に表現することができるかどうかを問う。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ

問1 全体をほぼ正確に訳せていたのは2割程度。Imprison を他の単語と勘違いした誤訳が目についた。

問2 prior to で「～以前」の意となることを理解して正答したものはごくわずか。

問3 citizenship（市民権）の訳が出来ていないものが多かった。また camps（収容所）を基地・駐留地などと誤解したものが多かった。

問4 正答は約半数。他は文脈が理解できていない。

問5 nationality の訳が出来ていないものが目立った。また、日系アメリカ人が質問に答え難い理由ではなく、質問の内容の説明をしているだけの答案が散見された。

問6 ふたつの質問にノーと答えた理由ではなく、日系アメリカ人にとってふたつの質問が答えづらい理由をあげる答案がやや多く見受けられた。

問7 接続詞 while は全体的に理解できていたが、複合関係代名詞 what、否定の意味の形容詞 neither がよく理解してない答案が多々見られた。主文の to help…以下の句の訳があまりにも直訳的なものも目立った。そのため、日本語訳がわかりにくい答案が半数以上あった。

問8 the U.S. government was mistreating his community at home の「at home」を訳すに当たって、「アメリカ国内で」とするべきところを、「母国の集団を」、「彼の母国の人々を」としてしまふ誤訳が目立った。また、「自分のコミュニティが冷遇されていた→兵役拒否→自分のコミュニティの仲間たちから非難される」という因果関係の順番が狂っているものも散見された。概して、兵役拒否については、読み取れていたようだ。

問題Ⅱ

(1) 語彙力は十分に身につけながらも、極めて基礎的な英文法の理解が不足しているために、高得点には至らなかった答案が目立った。また、出題されている日本文の内容を十分に把握せずに英訳を行い、結果的に、日本文と意味が合致しない英訳を行ってしまったケースも多かった。

(2) 日本語の意味をしっかりと理解して、自分なりの工夫をして英訳している答案が多かった。

(3) 「私」や「私たち」ではなく、「バス旅行をすること」をあえて主語にしている英語らしい表現の答案が複数見られた。名詞の単複、動詞の時制等々、文法的な間違いがやはり多かった。また、日本語の意味を理解していないものも多かった。

問題Ⅲ

問1 漢字の書き取り問題は、字のバランスに気を配り大きく丁寧に書くことを心がけてほしい。

問2 (ア)(イ)(エ)に誤答が多く見られた。特に(エ)の正答率は低く、30%程度。(エ)の正解である①の代わりに⑤を選んでいる答案が多かった。

問3 正答率は50%程度。①を選ぶ答案が多く見られた。

問4 正答率は50%程度。正解である「しるし」ではなく、「知らせ」「あくび」「場」を選んでいる答案が多く見られた。

問5 キーワードとして「無意識」がとりこめるかがポイント。「どのような」という点について、文中から適切な言葉を丁寧にひろいつつ説明することが求められる設問であった。

◆ 文学部人間関係学科 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

日本文、英文とも同じ著書（英文の方が原典、日本文はその翻訳）からの抜粋である。内容は一貫しているものであり、日本の少子化の原因のひとつとされている、未婚化、晩婚化の社会的背景について、ある一人の日本人女性へのインタビューをとおして考察している。

問1 戦前から1970年代までの日本女性の働き方について、英文のなかに述べられている著者の見解を的確にまとめるが要求されている。英文の読解力と、決められた字数の日本語でまとめる能力が試される。

問2 (1)と(2)の問いは互いに関連する内容である。一連の文章の結論とでもいえるア、イの内容を導き出す論拠を、英文のなかから見つけ、さらにそれを決められた字数でまとめる能力が試される。

問3 問1と問2で問われたことの意味が正確に理解され、さらにこの2つの内容を関連させることが解答の前提となる。その上で自分の見解を論理的にまとめることが要求されている。正確な読解力と、自分の考えをしっかりと持ち言葉にできる創造力の両面が評価の対象となる。

<答案の特徴と傾向>

設問1

戦前、戦後、50～70年代半ばと時代区分がちゃんとできていない解答が多かった。英語力が明確に読み取れた。

女性の地位に関するポイントをおさえているかどうか重要だった。

設問2

(1)では、指摘箇所は適切だが、英文の訳し方が適切でないものが多かった。

(2)では、問題文から具体的に導き出すのではなくて、社会の一般的な状況から導き出している解答が少なからずあった。

設問3

解答に英文の内容が反映されていないものが多かった。また、「変わっていない社会」についての掘り下げが浅く、「男は社会、女は家庭」のレベルにとどまっている。

設問1、2で問われた内容を繰り返し述べることにマス目を割いた結果、自分の意見を十分に展開していない解答も見受けられた。

女性が社会進出するための客観的条件について提示する解答は多いが、女性が何を求め、何を求めているのかについて考察する内容の解答はほとんど見られなかった。

◆ 文学部比較文化学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

本文は、文化人類学者であり社会言語学を専門とする川田順造氏の著書『コトバ・言葉・ことば』の中の論文「ことばの多重化＝活性化－多言語主義とは何か」の一部である。この論文は、人やその集団にとって言葉の使用はいかなる機能をはたしているのかについて、また西アフリカにおける多言語社会状況の実態について、現地調査をもとに論じたものである。

出題のねらいは、①言語に関する専門的な用語である母語、第一言語、言語の制度化などの意味を適切に把握して、筆者の考えを正確に把握する力を見ることであり、②自らの考えを表現する際の独創性・論理性・論述力を見ることである。

<答案の特徴と傾向>

問1

母語と第一言語とを同一視してしまって、傍線部の理由を説明している答案が目立った。また、傍線部の理由の説明でなく、本文全体の論旨を纏めているだけのものも散見された。

問2

筆者の考え方を十分に把握し吟味することなく付和雷同している答案が多かった。また筆者の論点から外れた事柄を論じた答案も多かった。

筆者は望ましい多言語主義として、個々人の多重的言語使用により自己表現を活性化し、相互理解を深めることが出来ると提言しているのだが、国家レベルの多言語主義、あるいは多文化主義に置き換えての論述が少なくなかった。また、外国語学習よりも前に母語である日本語、日本文化、歴史をしっかり学ぶべきであり、その後で外国語を習得し、日本独特の文化を語れるようになるべきであるといった論述も少なくなかったが、これは早期外国語教育政策を批判的に論じたものであり筆者の主張する多言語主義とは論点がずれている。

◆ 文学部人間関係学科 後期日程（集団面接・グループ討論）

<面接の意図・ねらい>

自分自身の見解をテーマに沿って論理的・独創的に表現できる能力、また集団の中で適切なかたちでリーダーシップを発揮していける能力を有する人材の選抜を行う。

なお、討論テーマはあくまでも討論のために設定されたもので、それ以上の意図をもつものではない。

<受験生の特徴と傾向>

出題に関わる時事的な問題に関心と知識を持ち、それを活かして自分の見解を述べる受験生がいる一方、表層的な知識のため討論に十分に参加できない受験生もいるなど、バラつきがあった。

司会に立候補しながら円滑に進行できない受験生が主導して討論が停滞する、討論の場での少数意見の受験生が多数意見の受験生に押され議論が深まりにくい、などの場面もあった。また、主題からはずれた討論の流れをうまく修正できる受験生も見受けられた。

◆ 法学部 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

【出題文選択の背景】

出題文の出典は、玄田有史『希望のつくり方』（岩波新書、2010年）である。

希望という言葉を見聞きすることはあっても、希望とは何かを教えてくれる人はいない。「若者に夢と希望を」といっても、何を若者が手にすれば、希望が得られたことになるのか。経済の停滞や累積する財政赤字などの重苦しい現実を前に、日本にはもう「希望がない」と言われたりする。筆者は、社会に生きる多くの人が、希望はないと感じるようになった理由は何なのか、そして、希望が前提でなくなった時代、私達は何を糧に未来へ進んで行けばよいのか、と問う。格差社会、高齢社会が進行し、とりわけ若者たちにとって希望を持つことの困難な状況の中にあっても、希望をつくり、希望を持つことの大切さを筆者は指摘している。

設問は、希望を持っていないような状況の中にありながら、にもかかわらず、希望をつくるということに関して、受験生がどのように考えているのかを問うものである。昨年の東日本大震災で全てを失った人々が絶望の中から新たな希望を持って立ち上がろうとしていることなどを踏まえながら、自分自身の希望と社会の希望をどのように作りどのように実現していこうとするのかということについて、受験生の考えを問うものである。

【受験生に何を望むのか】

第一に、文章の読解力・理解力が求められる。筆者のいう「希望のつくり方」ということについて、筆者の問題意識を十分理解したうえで、その主張のポイントをまとめることが必要である。

第二に、筆者の主張を踏まえたうえで、「希望のつくり方」ということについての自分の考えを論理的・説得的に述べることが求められる。

<答案の特徴と傾向>

問題では、筆者の主張の要約とそれに対する受験生の考えを述べることを求めている。筆者の主張の要約に関しては、全体として不十分な回答が多かった。特に目立ったのが、筆者が主張する論点ごとに箇条書きのようにまとめただけの回答である。そうしたまとめ方では、「要約」にはならない。筆者はいくつかの論点を提示しているが、基本的にそれぞれの論点は有機的に結びついていることに注意してほしい。

筆者の主張を踏まえたうえで、受験生の考えを述べる部分については、十分な回答が見受けられた一方で、不十分な解答も目立った。例えば、事前に用意してきた答案をそのまま強引に筆者の主張につなげようとする解答（原発問題等）、筆者が出題文中に述べている項目をそのままアレンジして自分の意見として述べる解答、すでに社会的に取り組みが始まっているものをあたかも自分独自の発想のように述べる解答、法学部の過去問の内容をそのまま活用する解答などである。「あなたの考え」は自由に述べることはできるとはいえ、受験生の自分の言葉で論理的説得的に考えたうえでの解答が最終的には求められる。

小論文対策の基本が全く身につけていないと思われる解答が多かったことも注意しておきたい。文章の構成、とくに主語と述語の関係、段落のつくり方、句読点の位置について不適切な回答がかなりあった。加えて、口語調の言葉（「ていうか」など）、誤字脱字なども見受けられた。「受験」という大事な機会にやはり、正しい文章の書き方及び正しい漢字をしっかりと身につけてほしい。これは、受験だけではなく社会生活一般でも大切なことである。

◆ 法学部 後期日程（面接）

<面接の意図とねらい>

法学部では、一般選抜後期日程試験において、面接による選抜試験を実施している。面接を重視している理由は、単にセンター試験の成績のみで入学者を選抜するのではなく、目的意識や社会的問題関心などを問うことにより、勉学への意欲と幅広い素養をもった学生を選抜するためである。したがって、面接にあたっては、①受験生の入学意欲や将来の抱負などを含む志望動機、②法学部学生として必要とされる社会科（公民）の基礎的知識と社会的問題関心及び論理的思考力、③面接試験におけるプレゼンテーション・コミュニケーション能力などを評価している。

<受験生の特徴と傾向>

前年度と同様に、面接試験では3問が出題された。第1問目は、例年どおり、本学法学部の法律学科または政策科学科を志望した理由についての問いであった。多くの受験生が事前に予測していた質問であったためか、本学法学部の特色を指摘しつつ、大学で勉強したい内容、卒業後の進路などを明確に解答するものが多かった。

第2問目は、「裁判員制度3年目の見直し論議について」問うものであり、受験生に具体的な論点を指摘させた上で、当該論点についての受験生の意見・考えを述べてもらうというものであった。本問は受験生の社会的問題関心と論理的思考力などを評価するために、出題されたものである。残念ながら、受験生の多くが、本質問について、新聞、TVニュースなど主要メディアにおいて数多く取り上げられている見直しの論点についての知識が充分でなかった。

第3問目は、受験生の社会的問題関心とともに、その問題に関連した社会科（公民）の基礎的知識を評価する設問となっている。本問は「首相公選制の是非について」問うものであるが、その予備的・前提的な知識として「議院内閣制はどのような特色をもった制度なのか」についても併せて質問するものであった。法学部を志望する受験生としては、全体的に「議院内閣制」そのものについての基礎知識の不足が顕著であり、首相公選制の是非についても自己の見解を明確に説得力をもって解答するものは少なかった。

最後に、多くの受験生において新聞、テレビなどのメディアで報道されている最近の社会的問題に対する関心およびその知見が残念ながら十分ではなかったように思われる。プレゼンテーションやコミュニケーションの能力の評価以前の問題として、多くの受験生の準備不足、勉強不足がうかがえた。

◆ 地域創生学群 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

今回の試験の出題文は、前年度に引き続き地域創生に関連した文章の中から、次の3点を念頭に置きながら選定しました。1点目は、地域創生やまちづくりを考える上で重要な人と人とのつながりや地域社会に関連した文章であること、2点目は、地域創生に対する関わり方について具体的に記述した文章であること、3点目は一般選抜であることを考慮して、一般的、かつ、平易な文章であることです。複数の候補を検討した結果、今村晴彦・園田紫乃・金子郁容（2010年）『コミュニティのちから―“遠慮がちな”ソーシャル・キャピタルの発見』慶應義塾大学出版会、及び、片岡義博「人が地域をつくり、地域が人をつくる」（所収：長岡秀世（2011年）『知行合一の旅人宮本常一その済民思想の伏流水』梓書院）、の当該箇所が、上記選定基準に鑑みて最も適当であると判断し、出題文として選定した次第です。

今回の出題文では、地域を創生する上で必要な「コミュニティのちから」がテーマとなっています。まず【A文】でコミュニティのちからとは何か定義し、その上でコミュニティのちからを高めるための地域活性化への取り組みの事例を【B文】で取り上げています。したがって、地域創生学群におけるいずれのコースを志望する受験生にとっても、地域創生に求められる概念や心構えをイメージしやすくなると判断しました。

設問では、①「コミュニティのちから」とは何かを【A文】から理解し、その内容を踏まえて、②コミュニティのちからを高めるための地域の関わり方について【B文】の内容をもとに説明することを求めました。求められた解答を論述するには、【A文】と【B文】の内容を簡潔にまとめるだけでなく、上記①の概念と②の事例を関連付けて記述することが必要となります。また、当然ですが、論理的思考能力や説得力は解答文全体を通じて評価されることとなります。

<答案の特徴と傾向>

上述しているように、まず、【A文】から「コミュニティのちから」は、地域コミュニティにおける“つながり”や“信頼関係”を生み出す共同資源、すなわちソーシャル・キャピタルに、日本社会の伝統を踏まえたひっこみ思案の“遠慮がちな”地域活動を含みこんだものであることを説明できていること、【B文】で述べられている地域との関わり方については、①自分が暮らしている地域に目を向けること、②その地域の歴史や文化、受け継がれてきた知恵を認識すること、③たとえ小さなことであっても、地域住民が主体となって行動することの3点を明確に述べていること、それに加えて、関わり方の根底にあるのが「そこに暮らす人々や、その土地に対する思い」、「地域の文化や郷土への愛情」であることを説明することを求めています。

全体的に「コミュニティのちから」に関する説明は記述できている答案が多くありました。しかし、前半部分の論述のボリュームが多い、または、【B文】をきちんとまとめることができているなどの理由で、【B文】で述べられている①から③まで全てについて説明している答案は多くはありませんでした。

一方で、「コミュニティのちから」について必要最低限で読みやすくまとめた上で、地域の関わり方について丁寧に書いてあるバランスの良い答案もありました。当然ですが、そのような答案には高い得点がつきました。

最後に、例年のことですが、受験生の意見を求めている設問であるにもかかわらず、自分の主張を述べた答案、自分の地域の活動の紹介など、出題文とはほとんど関係のない地域創生に関する事柄について述べている答案も少なくありませんでした。受験生には、本学地域創生学群の小論文の傾向をきちんと踏まえて、入学試験に臨んでほしいと思います。

<面接のポイント>

集団面接では、入学後、実習等においてチームでの活動が展開されることをふまえ、話し合いと実際の作業を必要とする課題を課し、一連のプロセスに対して評価を行うものとした。

◆ 国際環境工学部 前期日程 (理科・英語・数学)

理科 (物理・化学)

<出題の意図・ねらい>

【第1問～第3問 物理】

第1問

ばねの単振動について、力の作用と関連付けて、基礎が理解できているかを問う。

第2問

理想気体の状態変化に関する問題、理想気体の状態方程式や熱力学の第1法則に関する基礎的な知識を問う。

第3問

抵抗とコンデンサーの直流回路、および、交流回路に関する基礎問題。直流回路と交流回路におけるコンデンサーの動作、コンデンサーの静電エネルギー、抵抗で消費される交流電力の時間平均などの知識と理解を問う。

【第4問～第6問 化学】

第4問

17族元素のハロゲンを題材に、理論化学・無機化学に関する知識を問うた。単体・化合物・イオンの物性・反応についての基本的かつ典型的な問題である。

第5問

中和滴定、特に二段階中和についての正確な知識や理解度を問うとともに、化学反応式からの物質の量的関係を計算する能力を測る問題である。

第6問

有機化合物の構造やその化学反応、性質の理解度を確認する問題である。有機化合物の化学構造や反応に対する理解のほか、物質質量、気体の法則などの基礎学力が求められる。

<答案の特徴と傾向>

【第1問～第3問 物理】

第1問

ばねの伸びと単振動に関する基本的な問題であり、力と伸びと周期に関する問題の正解率は高かった。しかし、振幅と速さの問題は間違いが多く、特に加速度の問題の正解率は非常に低かった。このため、全問正解者は、全体で数名しかいなかった。

第2問

理想気体の状態方程式についての問題の正解率は非常に高かった。一方、熱力学の第1法則に関する問題の正解率が非常に低かった。熱力学の第1法則や内部エネルギーについてほとんど理解できていないと思われる答案が多々見受けられた。

第3問

正解率は低かった。セ、ソは比較的正解の答案が多かったが、テ、トは正解の答案が極めて少なかった。直流回路におけるコンデンサーの動作を正しく理解していない、また、交流回路をほとんど学習していない傾向が見られた。

【第4問～第6問 化学】

第4問

概ね良くできていたが、知識・理解が中途半端に止まっている答案も見られた。

問1 解答が前後の日本語にそぐわないものであったり、数字を聞かれているのに化学用語が書かれていたり、問題をよく読んでいないと思われる答案が散見された。また、漢字の間違いによる減点を避けるためか、平易な用語でもひらがな・カタカナで書かれている例が見られたが、教科書で漢字表記されているような用語は、きちんと漢字で書けるようにすべきである。間違った漢字で書かれた解答とひらがなで書かれた解答は知識不足と言う意味では同じである。

問2～問4 概ねよくできていた。

問5 水素結合というキーワードは知っていても、なぜそのような結合ができるのか、何と何の間の結合なのか(分子内の結合か、分子間の結合か)、その結合はどのような物性と関連するのかを理解していないようだ。化学をキーワードの暗記科目として捉えていては、化学を真に理解できないだけでなく、得点力もつかないであろう。

問6と問7 計算能力が不足しているのか、計算式まではできているのに最終的な解が間違っている答案や、そもそも計算していない答案が見られた。また、計算で得られた解が常識的にありえないような値であった場合(例えば密度が10の23乗や-23乗の値として計算された場合など)、その時点でおかしいと気付いて欲しい。

第5問

中和反応に関する基礎的な内容を問うたが、全問を通して正答率は極めて低く化学力の不足が窺われた。

問1と問2 水酸化ナトリウムと塩酸の中和反応の化学反応式を答えられない答案が多く見られた。炭酸ナトリウムについては、二段階に反応が進むこと理解していない答案が多く見受けられた。

問3と問4 問1と問2の化学反応式が理解できていないため、中和反応に要した塩酸量の内訳が理解できていない答案が多く見受けられた。

問5 正答率が極めて低かった。

第6問

第6問はすべて極めて基本的な知識とそれに基づいた論理的な思考力と計算力を測る問題で構成されており、難易度が低く、高い正答率を期待していたが、全問を通して正答率は極めて低く、化学の学力のみならず、計算力、論理的な思考力の不足が伺われた。

問1 反応の名称を答える問題であり、極めて容易な問題であり、8割程度の正解率を見込んでいたが、半分程度の正答率であった。

問2 2つの基本的な化学反応と反応により生じる水素と消費される水素の量的関係から未知物質の分子量の比を求める問題であったが、正解率は10%未満であり、何も記されていない答案が多く見られた。

問3 与えられた条件から未知化合物の一般式が分かり、燃焼反応が理解できていれば、炭素と水素の量的関係が分かる問題であったが、燃焼反応に対する理解不足のみならず、分子量と重量の関係についても理解が不足している答案が多く、正答率は10%未満であった。

問4 気体の法則と化学量論に対する基本的な知識を持つ問題であり、問2,3ができていない必要があるため、正答率は同様に低くなっている。しかし、仮に問2,3ができていなくても、気体の法則を正しく理解していれば、少なくとも反応で生成する水素ガスの正確な物質量は求められるはずであるが、これすらも正しく導くことができていない答案がほとんどであった。

問5 二置換芳香族化合物の異性体についての問題であり、正答率は50%程度であった。

英語

<出題の意図・ねらい>

第1問

問1 基本的な英語の構文を正しく取れているか、また any の訳出が正しくできるかを問う。

問2 第6段落目で記述されている内容が正しくつかめているかどうかを問う。

問3 基本的な語彙の知識があるかどうか、および文の構造を正しく取れているかを問う。

第2問

問1 基本的な英語の構文を正しく取れているか、特に不定詞を正しく取れているかを問う。

問2 本文の流れを正しく理解できているかを問う。

問3 数値を表わす表現を正しく理解できているかを問う。

問4 無生物主語の構文を正しく理解できているかを問う。

第3問

自分の意見を平易な英語を用いて記述する力を見る。特に語彙や構文の適切さ、文法的な英文を書く力を問う。

<答案の特徴・傾向>

第1問

問1・South Korea を「韓国」ではなく、「南韓国」「北朝鮮」「東南アジア」などと訳す事例が目立った。

・Canada を China (中国), Britain を Brazil (ブラジル) と訳す事例が目立った。

・except を捉えられている事例が少なかった。役に含めずにごまかす、優秀な (excellent) と誤訳する事例が目立った。

問2 本文中の答えとなる箇所を正しく見つけることができていない答案が多く見られた。また、“a zero-sum game” の意味を正しく理解できていない答案、「the+比較級, the +比較級」の構文を正しく訳出できていない答案も散見された。

問3 例年の傾向として、既知の名詞だけをつないで和文を想像する(創造する)解答が挙げられるが今年も多くの例がみられた。at some point についてはほぼ全員が「いくつかの点で」と解釈し、some に不特定の物を指す「ある」という意味がある知識がない。また基本的な助動詞の推量 may の意味を勝手に義務に書き換えている解答も多く見られた。また、主語のない和訳が多く、語尾に「…になる」をつけて処理しようとする傾向も見られた。

第2問

- 問1 「Gorrie's solution was」の solution を上手く捉えられないためか、意識に走る事例が目立った。「解決策は、・・・することだった。」と書くべきところを「・・・する。」で書き終えてしまい、主語・述語関係の記述不足の事例が目立った。
- 問2 問題箇所直前の段落の内容を正しく理解していない答案が多く見られ、正答率が低かった。特に、既知の語彙のみから内容を類推している答案が多かった。また問われている内容について、半分程度で説明を止め、十分に説明できていない答案も散見された。
- 問3 全体的に正答率が高く、よくできていた。
- 問4 例年のように、語彙の勝手な解釈 (globe を賞の授与, dramatically をドラマの出演) は見られたが、前半の make の 5 文型構造は比較的正確解されていて、構文は概ね取れていた。しかし invention, structure の正解率が低く基本的語彙の知識がもっと欲しいところである。

第3問

最も目立つ間違いとしては、和製英語の使用が挙げられる。例えば、mistake ではなく、「ミス」をローマ字で書いた miss を使ったり、try の代わりに challenge (チャレンジ) を書いたり、というような過ちが非常に多かった。また、動詞と名詞の区別がついていないミスも多かった。例えば fail を名詞として使い、failure を動詞として使う例が挙げられる。Success と succeed も同様である。一つ気になった点は、日本語の単語の類似性から来ていると思われるミスである。それは、I play an exam という文から窺える。日本語の「試合 (play a game)」と「試験 (take an exam)」との間違いから派生したのではないかと思われる。それと少し関連しているが、experiment と experience を間違えた受験生も少なくなかった。また、接続詞の使い方をちゃんと把握している受験生も少なかった。So や but など節と節をつなわず、文を二つに切って、2 番目の文の文頭に接続詞をおく、というようなケースが目立った。英語としては、とても初歩的なミスである。最後に、単なる過去形に物足りなさを感じているのか、過去形を避けて現在完了形を誤って使った受験生も多く見られた。

数 学

<出題の意図・ねらい>

第1問

絶対値を含む不等式、二次関数、二次不等式、三角比、場合の数に関する問題。それぞれについて基本的知識が身についているかを問う。

第2問

数学Ⅱ、数学Bに関する基礎力を確認するため、2次方程式の解、円と直線、三角関数、指数関数、数列の和の各内容について出題している。

第3問

微分法に関する問題。導関数の導出、及び導関数を利用した関数の極値、変曲点の導出、グラフ描画に関して理解しているかを問う。

第4問

まず、行列の逆行列を答えさせ、1次変換を問う。1次変換の逆変換は逆行列を使うことを確認する。

<答案の特徴・傾向>

第1問

何れも基本問題であり、正答率は全般的に高かった。

第2問

- (1) 解と係数の関係を利用する問題でタ、チの正解率は極めて高かった。
- (2) 軌跡の基本的な問題であるが予想以上に正答率は低かった。受験生全体に苦手意識が窺えた。
- (3) 三角関数の公式を利用する問題であり正解率は高かった。
- (4) 正解率は低かった。logを使用した解法までは正しかったが、求める桁数を1桁間違った答案が散見された。
- (5) 階差数列の一般項と和を求める問題であり、正解率は予想以上に高かった。

第3問

正答率は全体的に予想よりも高く、受験生にとっては平易な問題であったようだ。

その一方、増減表は完璧なのにグラフの概形が正しく描けていないものや、導関数や増減表は間違っているのにグラフの概形は正しく描けているものなど、不思議な答案も散見された。

第4問

- (1), (2) 基本的な問題であり、正答率は高かった。
- (3) 直線状の任意の点を1次変換し、変形すれば求められるが、直線状の任意の2点を1次変換し、その2点を結ぶ直線の式を求めた解答も見られた。正答率は3割程度であった。
- (4) 直線に関する対称移動を表す行列を求める問題であったが、対称移動という条件を用いることができた解答が少なかった。回転移動あるいは直線に関する対称移動に関する公式を用いて解いた解答もあった。正答率は2割程度であった。

◆ 国際環境工学部後期日程（数学）

■機械システム工学科（第3問選択A, B, Cの中から2問選択）

■情報メディア工学科（選択）

■環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問（第3問 選択A）

- (1), (4) 2次多項式に関する基本的な演算能力を問う設問である。
 - (2) 1次不等式に関する基本的な演算能力を問う設問である。
 - (3) 三角関数に関する基本的な演算能力を問う設問である。
 - (5) 集合論・命題論理に関する最も基礎的な知識を問う設問である。
- いずれも基礎能力の確認を狙っており、正確かつ迅速に解答することを期待する。

第2問（第3問 選択B）

複素数と軌跡に関する設問である。高度な知識や発想を問う問題ではなく、複素数や軌跡に関する基本定理の理解、論理的な思考力、正確かつ迅速な計算能力が要求される問題となっている。

第3問（第3問 選択C）

- (1) 三角関数の微分に関する問題であり、微分の基礎知識を持つかを確認する。
- (2) 定積分に対する理解度を確認する問題である。
- (3) 最大値、最小値問題であり、関数の微分、増減性を理解しているかを確認する。

<答案の特徴と傾向>

第1問（第3問 選択A）

基本的な問題である問題(1)～(3)は、正解率が高かった。
問題(4)は比較的やや正解率が低く、問題(5)の正解率が低かった。

第2問（第3問 選択B）

複素数、円の式など、基礎事項の理解度は比較的高かったが、(3)において基礎公式を駆使して二次方程式で表される軌跡を導く過程で、かなりのミスが見られた。また、単純な計算ミスが多く見られた。

第3問（第3問 選択C）

- (1) 3次関数と三角関数の積に関する微分問題であり、正答率が高かった。
- (2) 3次関数の定積分問題である。計算ミスをした答案が少しあった。
- (3) 関数の増減性を用いた最大最小値に関する問題である。係数の正負で場合分けが必要であるが、場合分けをしないまま解いた解答が相当数あった。

◆ 国際環境工学部後期日程（物理）

■機械システム工学科（第1問，第2問）

■情報メディア工学科（選択）

■環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問

物体の運動と音を組み合わせた問題である。斜面上の物体の運動，仕事，衝突，摩擦，ドップラー効果などの基本が整理して理解できているかを問う。

第2問

熱量，内部エネルギー，仕事の関係（熱力学の第1法則）に関する問題，グラフを描くことによって圧力と体積の関係（状態変化）が正しく理解できているかを問う。

第3問

直流回路と電磁誘導に関する基礎問題。電磁誘導の法則，キルヒホッフの法則，抵抗で消費される電力，などの知識と理解を問う。

<答案の特徴と傾向>

第1問

力学の問題に比べると，音の問題は正答率が低かった。等号／不等号や，符号（+／-）のミスで失点した答案が，非常に多かった。

第2問

理想気体の状態方程式を用いて気体の圧力を求める問題の正解率は高かった。熱力学の第1法則については，熱量の吸収と放出の区別がついていない答案が多々見受けられた。また，グラフを選択する問題の正解率も低かった。熱効率を求める問題の正解率はかなり低かった。

第3問

正解率は低かったが，満点もしくは満点に近い答案もあった。とくに，ヒ，フは正解の答案が極めて少なかった。電磁誘導を理解していない傾向や，キルヒホッフの法則を適用できていない傾向が見られた。

◆ 国際環境工学部後期日程（化学）

■エネルギー循環化学科

■環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問

問1 最も一般的なハロゲン元素である塩素を取り上げて種々の化学の基礎知識を問題である。

問2 アンモニアを例に取り、濃度、密度及び物質量などの知識とそれらを応用した簡単な計算問題である。

問3 多種類の陽イオンの分離に関する基礎を問う問題である。

第2問

電解質水溶液の化学平衡と pH などの化学的知識を問うた。緩衝溶液の考え方が必要な化学平衡の応用力を見る問題である。

第3問

有機化学の分野として、油脂のケン化を題材として、ケン化に必要な水酸化ナトリウムや生成するグリセリンの質量等の化学量論的な計算力および生成するセッケンの界面活性剤としての知識を問う問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問

基礎知識の有無を単に質問する問1及び問3の正解率は高かったが、問2の計算問題の正解率は低かった。

第2問

問3及び問4の間違が多かった。問3では、やや反応が複雑であるが、反応式を書いて反応後の各物質量を求め、電離定数及び pH を求める式に代入すれば解ける問題である。問4は純水に塩酸を加えて pH を求める平易な問題あったが正答率は高くなかった。

問2の2つの溶液を等容量混合したとき、容量が2倍になることに気がつかない解答が多かった。「小数第2位まで」という指示に従っていなかった解答も多く見られた。

第3問

化学量論の計算問題では、油脂の分子量の計算ミスが多数見受けられた。特に、油脂は脂肪酸3分子とグリセリン1分子のエステル体であることの認識が不十分であった。セッケンの界面活性剤としての最も重要な性質である洗浄力に関する問題は正答率が高かった。総合すると記述問題は概ね理解できているが、計算力が不足している傾向にあった。

◆ 国際環境工学部後期日程（生物）

■ 環境生命工学科（選択）

< 出題の意図・ねらい >

第1問

大気、水、光などの環境要因に対する植物の応答反応に関して、基礎的な理解力を問うことを意図している。

- 問1 環境と植物の応答に関する記述文を完成させる、基礎問題である。
- 問2 植物細胞に対する浸透圧の影響に関する知識を問う問題である。
- 問3 植物に当たる光の強度の違いと光合成、呼吸、葉の組織の構造との関係についての記述を通じて光合成の仕組みを理解しているかを問う問題である。
- 問4 ある植物における光周期と花芽形成の関係についての理解度を問うために、図の情報をもとに、導き出される法則性に関して記述をさせる問題である。
- 問5 日長反応の観点から植物のグループ分けをさせる問題。

第2問

酵素反応についての基礎知識を問うことを意図している。

- 問1 酵素の一般的な性質に関する記述文を完成させる、基礎問題である。
- 問2 ある酵素反応の過程を化学反応式で表現させる問題である。
- 問3 酵素の活性が調節される仕組みに関する知識を問う記述問題である。
- 問4 酵素の実験に関してやや高度な知識と理解力を問う問題である。

第3問

生態系に関して、基礎的な理解力を問うことを意図している。

- 問1 生態ピラミッドに関する記述文を完成させる、基礎問題である。
- 問2 生物濃縮に関する知識を問う記述問題である。
- 問3 生態ピラミッドとエネルギーとの関係についての記述問題である。
- 問4 生態系に関する簡単な数値計算をさせ、結果が示す意味について問う問題である。
- 問5 陸地と海洋における一次生産者の種類や特徴に関する知識を問う記述問題である。

< 答案の特徴と傾向 >

第1問

- 問1 基本的な知識を問う問題であり、良くできていた。
- 問2 作図をさせる問題であったが、解答に特徴がつかめない図が目立った。模式図で示すように指示されているが、必要に応じて部位を示す語句（ここではキーとなる細胞壁、細胞膜）を記し、より正確に解答の中で述べたい内容を伝えるようにしたい。
- 問3 比較的良くできていたが、本問で解答を求められている項目がどのような関連を持っているのかについての理解が不十分な解答が目立った。
- 問4 暗期が連続している必要があることを示していない解答や、具体的な数値（時間）を示していない解答が目立った。

問5 「短日植物」という解答は良くできていたが、植物名の選択については、正解が少なかった。身近な生物についての知識を充実させておきたい。

第2問

問1 概ね正答率は高かったが、補酵素に関する問いの部分で誤答が目立った。

問2 極めて平易な化学反応式で、概ね正答率は高かったが、中には誤った解答も見受けられた。反応式のH、Oの数が反応後でも同じかどうかは、せめて確認されたい。

問3 おおむね高い正答率であった。

問4 脱水素酵素の反応実験原理を問う発展問題であったが、きちんと理解できている受験生と全く理解できていない受験生の差が顕著であった。

第3問

問1 基礎問題であり、正答率が高かった。

問2 記述式のため、適切な表現ができていない解答も多かったが、比較的正答率は高かった。

問3 エネルギーの損失の理由を理解できていない答えが多かった。

問4 計算はできていたが、単位を記載した答えが少なく、そのため意味が理解できていなかった。

問5 問4との関連があったため、問4で平均寿命について理解ができていなかった受験者は、問5も解けなかったと思われる。

◆ 国際環境工学部後期日程（面接）

■ 建築デザイン学科

<面接の意図・ねらい>

はじめに4～5名を1グループにして20分程度のグループ面接を行った。

- ・東日本大震災の復興計画に関する質問
- ・他者への意見に関する質問

などに対し、回答を求めた。

次に10分程度の個別面接・口頭試問を行った。

- ・自己アピールおよびその内容に関する質問
- ・自分の戸建て住宅を建てる場合に第1に考えること
- ・本学科の教育目的・内容の特徴や特色などの理解度および学科への適合性を確認するための質問

などに対し、回答を求めた。

<受験生の特徴と傾向>

グループ面接では、自分の意見を明確に伝えられる受験生とそうでない受験生がいた。個人面接では、戸建て住宅を建てる場合に第1に考えることについて、多様な回答があった。なお、ほとんどの学生が本学科の特徴や教育内容を調べてきており、本学で学びたいという意欲が感じられた。

平成 24 年度入試の出題の意図、採点総評 《推薦入試》

◆ 外国語学部英米学科 推薦入試（全国：面接）（地域：小論文）

I 全国推薦

<出題の意図・ねらい>

例年通り、英語による面接を実施した。自身の英語学習について、本学科を目指す理由、大学生活の中で経験したいこと、などについて質疑した。試験官の質問を正しく理解し、適切に答えや自分の考えを述べることができるかどうかを判断した。

<傾向>

すべての受験生がかなり高いレベルでの受け応えをすることができた。

中には難易度の高い内容の質問もあったにもかかわらず、ほとんどの学生が質問の意図を正しく聞き取り、ほぼ正確に応答することができた。ほぼ全ての受験生が面接官が期待したレベルに達していた。

II 地域推薦

<出題の意図・ねらい>

出題の狙いとしては、日常の学習の成果を問い、英米学科での勉強の基礎的領域を習得しているかを見ることである。英文を要約する問題では、原文の主張内容の要点を把握し日本語で再構成できているかを問うている。英語で論述する問題では、自分なりの英語で自分の意見を表現できるかを問うている。

<答案の特徴と傾向>

- 問題 1 ポイントとなるのは、①英語の読解力、②要約する際の構成力である。この2つの点で答案にかなりな差がついた。
- 問題 2 基本的な単語がきちんと訳せているかどうかで訳文に差がついた。
- 問題 3 基本的な構文が組み合わさった問題である。基本的な構文がきちんと訳せているかどうかで差がついた。
- 問題 4 ポイントとなるのは、細かい文法的な正確さというよりむしろ、自分の意見を自分の知っている範囲の英語を使って、粗削りでもいいからきちんと表現できるかどうかである。その点で差がついた。

◆ 外国語学部国際関係学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

東日本大震災と福島原子力発電所の事故に関するアメリカ大統領の演説、そして日本の核エネルギー政策を論じた新聞、雑誌の記事を資料として取り上げた。問1では、英文の読解力および内容の理解力、さらにそれを日本語で的確にまとめる表現力を問うた。問2では、原子力発電所の賛否について、その論点を整理する問題によって、受験生の冷静で論理的な思考と、文章作成能力の評価をおこなった。時事問題と英語の資料を使い、国際関係を学ぼうとする学生の関心と資質を見る内容となっている。

<答案の特徴と傾向>

問1

問1では、問題文(英語)を500字以上600字以内の日本語で要約することを求めた。問題文の英語は難解なものではなく、多くの受験者は問題文の主旨を概ね理解した上で解答にのぞんでいたと言える。しかし、受験生の能力次第で、細部で読み間違いが解答に現れることとなった。また、時事的関心の薄いであろうと思われる受験生は、大統領に意図について、流れを正確に把握する点で不十分な解答になっていたと思われる。英語の力は十分であっても、段落ごとの要約を的確に行った上で、制限字数内でバランスの良い文章を書く文章力を磨く必要がある答案が多く見られた。

問2

本文は資料の趣旨を読み取り、問題文と二つの資料を整理した上で論点をきちんと述べる力を問うた。多くの答案が問題文の米国大統領オバマの態度を読み取れていたが、誤って理解したものや、まったく誤解した上で論じているものもあった。問題文と二つの資料すべてに触れていないものも散見されたが、それらは減点の対象となった。設問で明示しているように、この問題は論点の整理を求めているものであったが、問題文や資料を全く読み込まずに既存の知識だけで論点としたり、現代のエネルギー消費社会が悪いという観点からの提言を論じたりしたものもあった。

国際関係を学ぶ上では、自分の先入観を一度棚に上げ、資料で提示された議論を整理する力が重要である。その力は、本文で扱われている尖鋭な対立を含む争点でこそ、大いに必要とされる。

◆ 経済学部 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

比較的平易な社会科学の論文を課題文とし、その内容を正確に把握してまとめる力があるかどうか(問1)、与えられた課題に対して自らの主張を説得的（論理的）に展開できるかどうか（問2）をみることにあります。

<答案の特徴と傾向>

問1

なぜ歴史学が危機に立たされているのかを本文に即してまとめる問題である。課題文が比較的平易な文章であったため、ほぼ内容を把握していると思われる答案が多かった。しかし、課題文をそのまま抜き書きした答案が多数あり、まとめる力が不足しているように感じた。また、少数ではあるが、中学校で歴史を学ばないことが危機の要因であるとするなど、読解力が著しく劣っていると思われる答案があった。

問2

課題文の論旨をそのまま作文にした答案が多数を占めた。課題文に影響されるのはやむを得ないにしても、自分なりの主張が欲しかった。問うているのは「あなたの考え」である。少数ではあるが、学んだ歴史が自分自身にどのような影響を与えたかを踏まえて主張を展開する作文もあり、好感がもてた。逆に、予め準備していたと思われる内容を強引に課題と結び付けて議論を展開しようとした答案が間々みられた。

◆ 文学部比較文化学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題Ⅰ

問題文は、日本と欧米の生活文化における伝統や習慣の違いを考察するものである。問1, 2, 3, 4は英語の読解力、日本語の表現力を問う問題を出題した。問5は、英語の表現力、比較文化のトピックに関する発想力を問う問題を出題した。

問題Ⅱ

問題文は、日本と欧米の文化の差異、とりわけ人間観の違いを考察するものである。比較文化への関心の高さを問う出題を意図した。問1は文章全体を読解する力を問うための問題であり、問題文の論述の展開が把握できているかを試した。また問2は、言語をもとに日本と欧米の文化の違いについて論じることで、比較文化に対する関心の高さと、自らの意見を相手に伝える文章力について試した。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ

問1

正解率は2割ほどだった。設問は、異文化に属する人との交流に人々が引かれる理由について本文の内容に即して説明しなさい、と指示しているのだが、交流の目的や利点について述べているものが多く、また、独自意見を述べているものも目立った。「have lived overseas and enjoyed・・・」の箇所を、「海外生活の体験があり、楽しんだことがある」と訳せていない答案が多かった。また、「physically」を「心理的に」と誤訳する例も目立った。

問2

結婚に際しての日本人女性と欧米女性の職業観の違いを把握されることが求められている。多くのカップルは、長期的な生活設計に関する様々な事を互いに話す機会を持つことはないが、そのうちの 하나가「professional dreams」である。これに関する言及は、次の第4パラグラフではなく、第5パラグラフにある。問題は難しいとは思えないが、第4パラグラフの内容の内容をまとめた解答が多く見られた。

正解率50%。

問3

大きく外した答案こそないが、指定された字数で過不足なく内容をまとめるのは難しかったようである。正解率2割弱。誤答パターンとしては、「it was expected of them」の意味が取れていないものや、また、思い込みで文脈を推測しているのか、「neither of them actually wanted to have children」を「夫婦がともに子供を欲していた」と逆の意味で解しているものが少なからず見られた。

問4

比較的よく出来ていた。ただし、西洋では他人の親のみならず自分の両親の世話をすることも期待されていないという習慣についての言及があまり見られなかった。

問5

「作者の主張をどのように考えるか」を「自分の経験を盛り込みつつ」述べるという、設問の指示に従っていない答案が多かった。また、ごくごく基本的な英文法や単語の用法に関するミスや、問題文の英語を安易に書き写した答案も目立った。

問題Ⅱ

問1

いわゆる要約問題で、論旨をいかに正確に理解しそれを簡潔に表現できているかがポイントである。字数いっぱい書いてはあるが、問題文からあちこちの表現をなんとなく引用してつなぎ合わせたような、支離滅裂と言うべき答案が多かった。「肉食」と「人間のとらえ方」とが論理的に述べられていないものも多かった。

問2

具体的事例については、敬語を例に挙げた解答が目立った。言語表現の差異を国民性の差異につなげて論じようとするあまり、論理的に飛躍してしまう解答が目立った。

◆ 文学部人間関係学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

日本文と英文からなる一連の文章を読み、読解力、思考力とあわせた小論文の作成能力を把握することをねらいとした。本文は行動の道徳性についてのカントの考えを筆者が解説したものである。行動の道徳的価値について、行動を起こす動機の違いや行動に伴う感情の捉え方を説明させる問1・問2を踏まえた上で、問3では実社会において行動の道徳性を問う意義について受験者に論考を求めた。

本文部分では個人の行動の道徳的価値に焦点が当てられるが、当然ながら人は自己と他者が共存する関係性の中で生きている。視点を広げ、実社会にある自他の行動の道徳性が問われることにどのような意味があるのか、あるいはないのかを考察することが課題となる。

採点については、行動の道徳的価値を行動した結果ではなく動機や感情の観点から再考する本文の内容理解と共に、論述の中にみられる独自性や妥当性、論理的思考を評価の対象として重視した。

問1は、日本文の内容の要約を求め、読解能力を把握する問題を出題した。

問2は、本文の英文の読解能力を把握する問題を出題した。

問3は、本文で示された行動の道徳的価値の説明を踏まえ、実社会における行動の道徳性を問う意義についての論考を求めた。

<答案の特徴と傾向>

問1

説明を求められる問いに対して、解答内容が問題文中の抜き書きに終始しているために、意味が通らない文章が多く見受けられた。

問2

カントの考える行動の道徳性に関しての筆者の見解を問うものであったが、カントの考え方のみを答えているものや、カントと筆者の意見を対立的に捉えている解答が多く見受けられた。

問3

カントのいう道徳性とは、思いやりや同情とは切り離さなければならない特殊な概念である。そもそも、それが理解されておらず、むしろ逆のことをいっている解答が多かった。問1の論点を踏まえていないものや、設問に対応しない解答が多く、説明文の踏まえ方にばらつきがあった。

また、カントの「道徳性」の意味と、それを批判的に受け継ぐ筆者の「道徳性」の意味について、理解できている解答がほとんどなかった。もう少し、自分の主観から一步身を引いて、客観的に物事を考える習慣を養うことを望む。

◆ 法学部 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

【出題文選択の背景】

出題文の出典は、江口克彦『地域主権型道州制 日本の新しい「国のかたち」』（PHP 新書、2007年）である。

筆者はヒト・モノ・カネ・情報の一極集中によって東京だけが繁栄し、地方が衰退していくことを危惧し、本書全体を通して、日本が世界各国との経済・金融・文化・教育などにおける競争に勝ち抜くためには、統治形態を「地域主権型道州制」に変えることが必要であるという提言を行っている。

出題文は、「日本に『地域主権型道州制』を導入する」と題する章からとったものである。筆者は、明治維新以来続いてきた中央集権的な日本の統治システムを批判し、様々な広域的な行政課題（例えば環境問題など）や社会的な問題（ここでは人口減少や経済のグローバル化）に対応していくためには、行政単位を都道府県よりも規模が大きく、かつ財政基盤も強い広域の道州とすること、すなわち「新しい国のかたち」である「地域主権型道州制」を導入する必要があると主張している。ここでの「地域主権型」の意味は、地域（道州）のことは地域（道州）の判断と責任により政策展開をしていくということであり、筆者は外交・安全保障といった国全体にかかわる政策領域以外の権限と税財源を道州に完全に移譲すべきと述べている。

設問は、このような「地域主権型道州制」の意義や目的について、受験生が筆者の見解を要約したうえで、国のあり方についてどのように考えるかを問うものである。大阪都構想や東日本大震災からの復興が、国や都道府県、市町村との関係とともにメディアなどでも論じられるなか、国のかたちを抜本的に見直す必要がある、という巨視的な視点と統治システムの改革という論点は、受験生にとってアップ・トゥ・デートなテーマといえるだろう。住民のひとりである「私（たち）」として筆者の主張をとらえ、マクロな視点から自分の見解を論述してもらうことが本出題のねらいである。

【受験生に何を望むのか】

第一に、文章の読解力・理解力が求められる。筆者のいう地域主権型道州制について、筆者の問題意識や意義・目的を十分理解したうえで、その見解のポイントをまとめることが必要である。

第二に、筆者の主張をふまえたうえで、地域主権型道州制についての自分の考えを論理的・説得的に述べることが求められる。

<答案の特徴と傾向>

設問は、まず、「筆者の言う『地域主権型道州制』の意義、目的についての筆者の見解を要約」することを求めている。したがって課題文における筆者の見解の要旨をまとめなければならない。この点はおおむねできていたと思われるが、中には、「地域主権型道州制」の定義が欠けているもの、目的のみを記していて、要約の分量が少なくなっているものなど、筆者の見解の趣旨を正確にまとめることができていない答案がみられた。

設問は、次に、課題文に示された筆者の「地域主権型道州制」導入の見解に関して「自分の考え」の提示を求めている。受験生は、その導入の賛否について、どちらの立場に立って論述するのであれ、その両方を同等に論ずるのであれ、筆者の見解の論拠を批判するのであれ、自分の考えの理由や根拠を明示し、論理的に展開することが望まれる。筆者の見解を十分理解して、TPP など最近の問題と結び付けながら賛否を論じているものもあれば、賛否を論じていても、筆者の見解とは関係のないもの、あるいは、筆者の見解をそのまま「自分の考え」として引用しているため必ずしも「自分の考え」の論理的展開になっていないもの、などの答案がみられた。また、過去問にひきづられていると思われる答案や、羅列的な記述、主語と術語の関係が不分明なものなど、文章表現の仕方として不十分な答案も若干ながら散見された。

◆ 国際環境工学部エネルギー循環化学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問

問1、問2

化学反応の初歩を理解していることを確認するとともに基礎的な化合物の化学式を身に着けているかを確認する問題。また、簡単な数学的知識と理解力を確認すると共に、技術文章に対して理解力とコミュニケーション力があるかを確認する目的で出題している。

問3

環境と資源に対する基礎知見の量と質を確認し、文章構成能力を問う問題。

第2問

化学や物理、工学において基礎となる物理量と単位や次元に対する知識と理解を問う問題。

第3問

電気分解に関する初歩知識（電極における反応）や、ファラデーの法則の理解と活用法を問う問題。加えてボイル・シャルルの法則あるいは気体の状態方程式の理解を問うている。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1、2

簡単な比例と燃焼の問題にも関わらず比較的正答率が低かった。

問3

問1、2を前提としており、火力発電の改善点を問うていたにもかかわらず、多くの学生が新エネルギー等について述べていたため得点率が低かった。

高得点のためには題意を正確に読み取る事が求められる。

第2問

SI 単位系は比較的解答率が高かった一方、誘導単位、特に単位の変換はほとんどの学生が解答できていなかった。

第3問

電極上の化学反応式は比較的解答できていたが、電力や時間等を計算できた学生は数名にとどまった。

面接

<面接内容>

本学への志望動機や本学で学びたいことを最初にプレゼンさせた。その後、環境用語に関する質問、時事問題に関する質問を行い、基礎学力、意欲、コミュニケーション能力等の項目について評価した。

<受験生の特徴と傾向>

環境への意識や修学意識は総じて高かった。一方で、面接教員の質問の意図を正確にくみ取れず、質問の意図とは異なり自分で練習してきたと思われる“用意した回答”を述べる学生も見られ、この点がコミュニケーション能力の差として得点差につながった。

◆ 国際環境工学部機械システム工学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問（数学）

基本的な概念の理解を確認する問題である。

第2問（数学）

空間におけるベクトルを使った直線の方程式や、直線と平面との交点、直線と点や直線との最小距離を求めさせ、ベクトルとその扱いや2次関数の最小化を理解しているかを確認する問題である。

第3問（物理）

問1 物体の運動の基礎を確認する問題とした。

問2 熱とエネルギーの基礎を確認する問題とした。

問3 オームの法則と直流、交流の基礎を確認する問題とした。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

いずれも極めて基本的な問題である。全問正解であることが望ましいが、意外にもそうでない答案が多かった。特に、問1の正答率が低かった。

第2問（数学）

空間における直線のベクトル方程式を利用して直線の媒介変数表示を求め、3つの小問に答える問題である。

問1 正答が見られたが、媒介変数を効果的に利用した解答は少なかった。

問2,3 直線の媒介変数表示を使って最小距離の計算を2次関数の最小化に帰着させることができず、正答がなかった。

第3問（物理）

問1 斜面上の球の運動エネルギーおよび加速度を求める問題は正答率が高かったが、それ以外の問題は誤答が目立った。

問2 気体の体積、温度をボイル・シャルルの公式から求める問題、気体の圧力を求める問題は正答率が高かった。気体のした仕事、内部エネルギーの増加量を求める問題の正答率は低かった。

問3 正答率は低かった。抵抗の直列・並列接続とオームの法則を問う問題、交流の実効値を問う問題、いずれも基礎的な内容を理解できていない解答が目立った。

面接

<面接の形態>

受験生 16 名に対し、1 人 10 分程度の個人面接を実施した。

<面接内容と意図>

(1) 志望理由等に関する質問

機械システム工学科を志望する動機、将来の進路などについて質問し、学科についての理解度、機械工学への学習意欲、学科への適合性などを見極める。さらに、コミュニケーション能力を確認する。

(2) 物理と数学に関する質問（口頭試問）

機械工学を学ぶ上で不可欠な基礎学力（物理、数学）の理解度とその表現力を確認する。

<受験生の特徴と傾向>

志望動機に関しては大方の受験生が準備してきた内容を指示した時間内に説明できていた。学科の教育方針に沿った「ものづくり」、「環境問題」などに関連させた内容であったが、それに対して、具体的な内容を質問すると、返答に窮する学生もいた。

将来の目標、合格後から入学までの過ごし方などの返答から、機械工学を勉強する意欲の高い学生が多かったように思う。

物理と数学の基礎的質問に対しては、緊張のためか完全に回答できた学生は少なかった。物理の問題では、種々の法則や現象に対して、ただ数式を丸暗記しているのではなく、理解して表現できることが必要である。

◆ 国際環境工学部情報メディア工学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問（数学）

基本的な概念の理解を確認する問題である。

第2問（数学）

空間におけるベクトルを使った直線の方程式や、直線と平面との交点、直線と点や直線との最小距離を求めさせ、ベクトルとその扱いや2次関数の最小化を理解しているかを確認する問題である。

第3問（物理）

問1 物体の運動の基礎を確認する問題とした。

問2 熱とエネルギーの基礎を確認する問題とした。

問3 オームの法則と直流、交流の基礎を確認する問題とした。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

いずれも極めて基本的な問題である。全問正解であることが望ましいが、意外にもそうでない答案が多かった。特に、問1の正答率が低かった。

第2問（数学）

空間における直線のベクトル方程式を利用して直線の媒介変数表示を求め、3つの小問に答える問題である。

問1 正答が見られたが、媒介変数を効果的に利用した解答は少なかった。

問2、3 直線の媒介変数表示を使って最小距離の計算を2次関数の最小化に帰着させることができず、正答がなかった。

第3問（物理）

問1 斜面上の球の運動エネルギーおよび加速度を求める問題は正答率が高かったが、それ以外の問題は誤答が目立った。

問2 気体の体積、温度をボイル・シャルルの公式から求める問題、気体の圧力を求める問題は正答率が高かった。気体のした仕事、内部エネルギーの増加量を求める問題の正答率は低かった。

問3 正答率は低かった。抵抗の直列・並列接続とオームの法則を問う問題、交流の実効値を問う問題、いずれも基礎的な内容を理解できていない解答が目立った。

面接

<面接内容と意図>

- (1) 本学科を志望する動機、将来の進路などについて質問し、学科の教育内容の理解度や学修意欲などを確認した。
- (2) 数学の基本問題に関する口頭試問では、必要に応じてヒントを与えて、総合問題で確認できない受験生の持つ本来の実力を引き出そうとした。

<受験生の特徴と傾向>

- (1) 学科の教育内容と志望動機については、明確な回答が得られ、時間をかけて推敲し、繰り返し練習したことがうかがえた。将来の進路については、具体的なイメージを持っている受験生とそうでない受験生とに分かれた。
- (2) 口頭試問については、個人差が大きく、ヒントによって解法を思い出す受験生とうまく説明できない受験生とに分かれた。

◆ 国際環境工学部建築デザイン学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問（数学）

基本的な概念の理解を確認する問題である。

第2問（物理）

問1 物体の運動の基礎を確認する問題とした。

問2 熱とエネルギーの基礎を確認する問題とした。

第3問（造形）

問1 建築のデザインを行う上で基礎的な素養として必要な立体的な空間の認識力・想像力、三次的な表現力、スケッチによる描写力等の総合的な造形力を見る。

問2 与えられたテーマに対して的確に題意を捉え、自らの見解を的確に述べているかを問う問題である。特に、想像力、発想力、論理的思考力、文章表現力を見る。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

いずれも極めて基本的な問題である。全問正解であることが望ましいが、意外にもそうでない答案が多かった。特に、問1の正答率が低かった。

第2問（物理）

問1 斜面上の球の運動エネルギーおよび加速度を求める問題は正答率が高かったが、それ以外の問題は誤答が目立った。

問2 気体の体積、温度をボイル・シャルルの公式から求める問題、気体の圧力を求める問題は正答率が高かった。気体のした仕事、内部エネルギーの増加量を求める問題の正答率は低かった。

第3問（造形）

問1 椅子がどのような立体であるかを想像し、異なった角度から描き出すことによって、立体的な空間の認識力、想像力、また、スケッチ力等を見た。異なる角度からの描写に関しては、ある程度立体感覚がうかがえる答案が多かったが、提示された椅子自体の形状、素材感を写真から正確に読み取り表現できた答案はほとんど無かった。スケッチ力も、全体的に、ややレベルが低く、座面の素材感や椅子の骨組みの丸みなどを的確に表現できている答案は、あまり無かった。

問2 椅子のデザイン、素材感などから、どのような場所で使われるべきかを想像し、説明することによって、想像力、発想力、論理的思考力、文章表現力を見た。文章自体は、しっかり書かれている答案が多かったが、表現が話し言葉になっているものなど、一文が短く、説明不足の答案もあった。使われ方に関しては、喫茶店や食事をするとところとの答案が多く、独自の発想はあまり見られなかった。

面接

<面接内容>

10分程度の個別面接を行った。

- ・高校生活の充実度や実績・積極性に関する質問
 - ・東日本大震災の復興に関する質問
 - ・本学科の教育目的・内容の理解度および学科への適合性を確認するための質問
 - ・「建築」に対する興味や意識の高さを確認するための質問
 - ・本人の長所を確認するための質問
- などに対し、回答を求めた。

<受験生の特徴と傾向>

本人の意見を的確に述べることができる受験生と予め準備していた回答だけしか述べることができない受験生がいた。震災の復興に関する質問についてはやや難しかったためか、なかなか的確な意見が出てこなかった。学科の特徴やカリキュラム内容及び「建築」に対する興味については、ホームページ等によって詳しい情報を入手しており、多くの受験生から本学科で学びたいという意欲が強く感じられた。建築に関する知識はインターネット等でよく調べている学生が多かった。中には実際に見てきた建物について言及できる受験生もいた。

◆ 国際環境工学部環境生命工学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

（第1問 必須）

（第2問 A、B、Cから1題選択）

<出題の意図とねらい>

第1問（化学）

昨今、地球環境問題として話題になっている地球温暖化を取り上げた。人為的な二酸化炭素の発生源を化学の視点から捉え、二酸化炭素の削減のためにどういった取り組みができるかを考える問題である。まず、日本が消費している石油換算の一次エネルギー消費量から二酸化炭素の排出量を計算する問題は、飽和炭化水素と燃焼の反応式を理解しているかを問うている。つぎに、日本の世界に占める二酸化炭素の排出量比率を求める問題は、石油の消費量と燃焼の関係を理解し、加えて基本的な単位換算ができるかを問うている。最後の記述問題は、上述のことを理解した上でどういった物理・化学的なアプローチが考えられるか、受験生の科学的想像力と論理的思考力を問うている。

第2A問（化学）

簡単な構造の有機化合物の性質・反応を題材に、構造と物性、反応熱、酸化還元反応、有機化学反応などに関する知識を問うた問題である。

問1 有機化合物の構造とそれに起因する物性の関係を理解しているかどうかを問うた。

併せて光学異性体に関する簡単な知識を確認した。

問2 典型的な酸化剤である二クロム酸イオンを題材に、電子を含む酸化還元反応式が書けることを確認するために出題した。

- 問3 分子の構造と分子を構成する原子の性質が、分子の性質に大きな影響を与えることを理解しているかどうかを問う問題である。水分子の沸点が高いという「知識」はあるだろうが、その本質的な理由を、電気陰性度・極性・水素結合などの概念とともに理解していれば、有機化合物についても同様の物性が見られることは容易に理解できるだろう。
- 問4 簡単な有機化学反応式を書かせた。反応自体は非常に簡単なものであるが、反応させる条件により異なる反応が進行するということを理解してもらいたい。
- 問5 反応熱に関する基本的な問題。生成熱の定義とヘスの法則について理解していれば、簡単な計算で求めることができる。

第2B問（生物）

植物の反応と調節を題材として生物分野の基礎知識を問う問題である。植物の屈性とそのしくみについて正しく理解しているか、また光周性と発芽形成のしくみについて正しく理解できているかどうかを評価する問題である。

第2C問（物理）

- 問1 力学的エネルギー保存の法則、運動の法則の理解力を確認する問題とした。
- 問2 ドップラー効果の理解力を確認する問題とした。
- 問3 抵抗線の直列接続と並列接続、オームの法則の理解力を確認する問題とした。

<答案の特徴と傾向>

第1問（化学）

- 問1 炭素数11の飽和炭化水素の化学式は概ね理解されていたが、燃焼式から二酸化炭素の排出量を求める段階では、正答したものは半数強程度であった。
- 問2 上述の結果を用いて、石油消費量から総排出量および比率を求める問題であり、計算は単純であるが考え方や単位換算を間違っているものも比較的多く見受けられた。
- 問3 問1、2の結果を踏まえて二酸化炭素の削減の取組を考える、という問題であったが、題意に沿わない解答が多数みられた。また、起承転結が不明確であり、基本的な文章構成に欠けるものが目立った。

第2A問（化学）

- 問1 比較的良くできていたが、窒素を含んだ化合物の構造式が描かれていたり、「例にならって」描かれていないなど、問題文を読んでいないのかと思われる答案も見られた。
- 問2 反応前後で物質質量や電荷が一致しない反応式を書いている答案が見られた。教科書にそのまま書かれているような、簡単な反応式を問う問題ではあるが、酸化還元化学反応式がどのようにして立式できるのかを理解していれば、記憶に頼らずとも問題文の情報だけから解答できるはずである。
- 問3 無解答の答案が多かった一方で、有機化合物の構造と物性の関係についてよく説明できているものも見られ、差がはっきりと出た問題であった。この問題に解答できている答案では、他の問題もよくできていた。
- 問4 比較的よくできていた。
- 問5 熱化学反応式を立式せず、生成熱の加減だけから求めている解答が多かった。本問ではそれでも正解にたどり着けるが、生成熱を含んだ化学反応式を立式し、物質の収支を考慮しながら加減し、反応熱を求めるのが基本であることを理解して欲しい。

第2B問（生物）

植物ホルモンの働きを中心に、植物の外部刺激への反応と成長の調節を題材として生物分野の基礎知識を問う問題であるが、天然のオーキシンの化合物名の正答率は高かったが、合成オーキシンの例をあげることができた答えは少なかった。植物の光屈性と頂芽優勢における植物ホルモンの働きについては、光屈性についての理解度が高い傾向にあった。以上については、解答者の間のばらつきは小さかったが、春化处理と日長の影響については、理解度に大きなばらつきがみられた。

第2C問（物理）

問1 力学的エネルギーの保存則から物体の速度を求める問題の正解率は約 56%であった。粗い斜面上の物体の加速度を求める問題の正解率は約 13%、粗い斜面上を上向きに運動した物体が再び同じ位置を通過するまでの時間を求める問題の正解率は約 6%とかなり低かった。問1全体の正解率は約 21%であった。

問2 ドップラー効果の基礎的な理解度を問う問題であったが、壁からの反射音の波長を求める問題の正解率は4%とかなり低かった。問2全体の正解率は約 16%であった。

問3 回路の合成抵抗を求める問題の正解率は約 70%と高かったが、回路の分岐点を含む電圧と分岐点を通る電流を求める問題の正解率は約 27%であった。問3全体の正解率は約 45%であった。

面接

<面接形式と内容>

基礎学力、意欲、コミュニケーション能力、人物、その他の各項目について、5人1組になり、30分程度の集団面接を実施した。

<受験生の特徴と傾向>

環境問題に対する質問に関しては、十分に準備してきたものと思われ、多くの受験生が質問に対して的確に回答していた。しかしながら、環境問題に関する真の理解が不足しているのか、具体的な内容になると間違えた発言なども目立った。今年度は、積極的で、まじめな学生が多い印象を受けた。

平成 24 年度入試の出題の意図、採点総評 《AO入試》

◆ 外国語学部英米学科 AO入試

<出題の意図・ねらい>

1. 英文読解力と講義の聴解力を見る問題。英文はやや難易度が高いが、その分、講義を良く聴いて内容理解に努めているかが評価のポイントである。
2. 英語と日本語の背後にある文化について、ていねいに考察する力を身につけているかを見る問題。比較的難易度は低く、論理的な英文を書くことができるかどうかの評価のポイントである。
3. 模擬授業担当教員の説明を正しく聞き取り、その上で批判的に考え、自分の解釈を論理的に述べることができるかどうかを見る問題。語学力を超えた総合力を判断する問題である。

<答案の特徴>

1. 文章を読むことに専念しすぎ、模擬授業担当教員の説明をあまり考慮しない答案が多かった。優秀な答案は、教員の説明を見直すところからスタートしていた。
2. 今回の試験でもっとも回答しやすい問題。比較的得点ができていた。
3. 完答できた答案はあまり多くなかった。優秀者はこの部分でも良い答案を作っていた。英語で論じることは確かに難しいかもしれないが、日本語でなら論じられるわけではない。論述という形式にもっと慣れておく必要がある。

<二次試験面接のポイント>

- 1 次試験において英語読解力および論述力を見ているので、二次試験のポイントは、口頭で意見を述べる力を見ることと、今後英米学科で学習していく上での適性を判断することがポイントとなる。
受験生はいずれも高い能力と適正を示していたが、入学枠の制約があり、上位者のみを合格とせざるを得なかった。

◆ 地域創生学群 AO入試

<出題の意図・ねらい>

今回のAO入試一次試験では、地域創生に関する様々な内容を検討した結果、『僕を探しに』（シルヴァスタイン作、講談社）を読み解きながら、自分との向き合い方や地域との向き合い方、ならびに地域を創生する上での大切な姿勢について考えるような模擬授業の内容としました。

設問では、模擬授業を踏まえて、講師が言いたかったことをまとめることを求めました。具体的には、①「結果の重視」と「他者との比較で自己評価すること」の問題点、②過去から現在までの自分自身の成長を評価し、自分を受け入れ、その上で次の一步をどう進めるかを知ることの大切さ、③自分との向かい方がひいては地域の良さの探し当て方、より良い地域づくりのスタートにつながることに、という3点を理解した上でそれらを簡潔にまとめることができるかがポイントになります。また、当然ですが、論理的思考能力や説得力は、解答文の全体を通じて評価されることとなります。

<答案の特徴と傾向>

全体の傾向として、②については、しっかりと押さえることのできた答案が多く見受けられました。しかし、①を論理的にまとめた答案はあまり多くありませんでした。また、①～③の要点が整理できておらず、模擬授業の内容をただ羅列しただけの散漫な内容になってしまった答案や、『僕を探しに』の内容をまとめただけの答案など、肝心な部分の説明が抜け落ちている答案も目立ちました。さらに、あらかじめ自分なりに準備してきた内容や設問で問われていない自分の経験談、自己PRなどに終始したケースも見受けられました。

その一方で、①～③のポイントがしっかりと理解できている答案や、その努力が見られる答案もあり、そのようなケースについては高い得点がつきました。

<集団面接>

集団面接では、地域創生学群における実習をはじめとする様々な活動を行う上で必要となる、チームでの作業をうまくこなせるかどうかを見極めることを狙いとした。

<個人面接>

個人面接では、プレゼン能力の有無を見ることに加え、経験を学びに変える能力があるかどうか、またそのポテンシャルがあるかどうかを見ることを狙いとした。